

平成二十九年度

大妻中野中学校

第四回アドバンスト選抜入学試験

問題用紙

第二回グローバル入学試験

(二月三日午前)

国

語

座席番号
番

受験番号
番
氏名
名

受験上の注意

- (一) この問題用紙は表紙を含めて8ページあります。
- (二) 試験開始後ただちにページ数を確認して下さい。
- (三) 問題用紙、解答用紙それに座席番号と受験番号と氏名を記入してください。座席番号と受験番号は算用数字で記入してください。
- (四) 試験時間は五十分です。
- (五) 解答はすべて解答用紙に記入してください。
- (六) この試験は百点満点です。

## 一 次の文章を読んで、あとの問い合わせに答えなさい。

稻作とともに始まつた、日本人の水との生活。そして高い湿気との闘い。それらが見事に日本の風土と<sup>\*1</sup>相俟つて定着したのが、東大寺の正倉院で有名な、校倉造りの建築法である。

正倉院は、八世紀の中頃に建立された高床・校倉造りの倉である。そして、①正倉院御物として有名な一万数千点の宝物は、千二百年経つた今日まで、完全な形で残されている。まさに驚くべき貯蔵技術である。

そしてその秘密が、室内を常湿に保つという校倉造りの技法であった。

校倉造りというのは、三角形（台形もある）の断面を持つ材木を横に組み、一段一段組み上げていく建築法である。高床式であるため、土からの直接の熱を避け、さらに校倉の材が、気候によって伸縮するので、室内の湿度がほぼ一定に保たれるのである。泥壁や土壁に匹敵する秀れた建築技術といえるだろう。

床を高くし、泥壁を考案したうえに、日本人は、もうひとつ知恵を加えた。それが日本の座敷である。

畳もやはり壁同様に呼吸している。A、日本の家屋は、家全体が呼吸しているといっていい。柱も床板も壁も、雨の多い季節には膨張して外と内とをピツタリ遮断し、壁や畳は室内の湿気を吸い、乾燥してくると、その湿気を吐き出して外より湿度を高くする。私が②日本の家屋は生きているというのは、こういうことである。

水田農耕と湿気の多い風土という条件の中で生まれた、日本特有のものは数多くあるが、その典型的のひとつが“下駄”である。

下駄は、元来は“田下駄”といつて、深い水田に入るとき、体が沈まないために発想されたものだ。それが陸で歩くとなると、鼻緒<sup>はなお</sup>がすぐ切れてしまう。そこで裏に回った鼻緒の端を守るために歯をつけた。下駄は足全体が開放されているから当然、通気性がいい。B、欠点は傾斜の強い場所、たとえば山登りのときなどは、二本歯では<sup>\*2</sup>平衡が保ちにくい。

そこで考案されたのが、牛若丸<sup>うわかもる</sup>が履いていた一本歯の下駄である。山岳用一本歯下駄とでもいうか、これはどんな斜面でも足の平衡が保てて、実際に歩きやすい。さらに浜下駄<sup>はまげた</sup>という傑作がある。これは太い竹を二つに割つて鼻緒をすげたものだが、足を乗せる所が曲面になつていて、材質が竹で、つるつるした曲面だから砂が乗らなくて、砂浜を歩くのに具合がいい。砂浜用だから浜下駄で、のちの駒下駄の原型である。

③水田の中を歩く田下駄が、湿気の多い路面を歩く二本歯の下駄になり、山岳用や砂浜用の下駄を生んでいき、さらにさまざまな形の下駄を生んで、その名称だけでも百数十種におよぶ。

平安時代に書かれた『病草紙』という本がある。当時の病気について記述したものだが、この中に「水虫」が出てこない。水虫が拡がり出したのは、軍隊が、いま私たちが履いているような“洋靴”を履き出してからである。西洋の靴は、わずか百年くらいの間に、日本史上になかつた水虫

という病気を、私たちに馴染みぶかいものにしてしまったのである。

西洋の靴は、北方系の遊牧民族だったゲルマン民族が、ヨーロッパを征服したときに、同時にたらしたもので、それ以前のローマ、ギリシャではない。洋靴は通気性よりも保温性を重視したもので、寒い風土の生んだものである。日本のような湿気の多い風土には合わないのである。

通気性がないから足が密閉される。密閉されると汗が逃げない。西洋人が他人の家を訪問した際、靴を脱がないのは、脱ぐ必要がないという風習以外に、足が蒸れて臭くなっているからだ、という話を聞いたことがあるが、それほどでたらめな作り話ではないだろう。

乾燥して寒い所ですら、そうなのだから、日本のような風土では④なきらで、結果として水虫の薬がよく売れるようになつたのである。

日本の履物は、先述した下駄、それにわらじが代表的なものだが、靴がなかつたわけではない。洋靴とは少し違うが⑤“ツナヌキ”という立派な靴があつた。ツナヌキは猪の毛皮で出来ていて浅い。浅くて脱げやすいから、底からぐるぐると綱を卷いてくくつてある。□C “ツナヌキ”と名付けられたのだが、浅く作つてあるのは、通気性を第一に考えたからだ。この靴は、今日でも地方の農村に行くと生きている。猪の皮の毛がそのままついているからカツコ悪いというが、毛が生えているのは必要があつてのことである。毛があるために水の中につかっても、\*3撥水性があつて水びたしにならない。水が浸透しにくい。今日の靴は\*4なめし革だから、水につかるとすぐ、革が水を吸つてふやけてしまう。

毛の生えた靴だと、にかわ分が残つてているから水は浸透しない。しかも、保温性が強いから暖かい。□D 、このツナヌキの中に藁を詰めたり、唐辛子を入れたりして履く。唐辛子はビタミンAだから、足を入れて摩擦すると、発熱がよく、さらに暖かくなる。自動車にヒーターがついていないうち、タクシーの運転手さんは、これをやつていたと聞くが、日本人は案外、発想が自由で科学的だと思う。いずれ私たちの祖先は、通気性と同時に保温性を兼ねた靴を持っていたのだ。ただ、それを私たちは、西洋の価値を基準にした尺度で物ごとを計るから、伝統的革靴に毛が生えていると笑うのである。奈良県では、今日でも正月市に、この伝統的毛革靴が売られているが、これが姿を消してしまったのも、そう遠いことではないかも知れない。

そうなると、平安時代末期の武者絵や、楠木正成の古い絵本の中でしか、もうツナヌキにはお目にかかれなくなるだろう。

わらじは東南アジアに共通のもので、サンダルと同系のものである。このわらじが、足の指先を鼻緒にひつかけるだけの草履になり、これが洋靴と出会つたときに、鼻緒つきスリッパを考案させたのである。あの洋靴のかかとの部分を捨てて、先だけを残したスリッパは、日本人が和洋折衷の家屋を造つたときに、同時に生んだ日本人の知恵である。

わらじは日本では足にくくりつけて、これを“沓”と呼んだ。日本には、ブーツの発想は中国文化をまねた公家以外では、ただ雪靴があるだけである。雪靴の材質は乾燥した藁で、軽い上に、断熱性が強く、通気性もある。雪の上を歩くには、もつとも適した履物である。

日本人は、それぞれの使用目的や自然の条件に対応して下駄、わらじ、草履、ツナヌキ、雪靴と、さまざまな履物を作りあげてきた。生活の知恵というのは、その根底において、ひじょうに高度な□ をそなえているものだが、そのもうひとつの代表に藁がある。

日本は雨が多く、雨が降るとさらに湿度が高くなる。これに対応して出来たのが蓑だ。

西洋のレインコートの元は、獣の皮である。皮には通気性はほとんどない。

⑥日本では、第二次世界大戦が終わるころまで、線路工夫に蓑を支給していた。これを見た外国人が、

「蓑なんて東南アジアにしか残っていないのに、日本の、いやしくも文明機関である列車の工夫が、蓑を着て線路を叩くなんて……」

と笑つた。そこで、政府はゴムのレインコートを支給することにした、というエピソードがある。

だが、その結果、ゴム長にゴムのレインコートでは、労働が十五分以上続かない。それが蓑だとさほど苦しくなく二時間ぐらいは、継続労働に耐える。乾燥した草でできた蓑は、雨の中でも十分に風を通すし、しかも、雨を中まで通さないという、労働用のレインコートとしては理想的なものなのだ。今日でも、まだ蓑に替わるほどのすぐれたレインコートは、出来ていないのである。

私は、⑦日本のような湿気の多い国のためにも、通気性という観点からいま一度、グラス（草の）レインコートを考え直してみる必要があるよう

（樋口清之『梅干と日本刀——日本人の知恵と独創の歴史』による）

### 〔注〕

\* 1 相俟つて：二つ以上のことと重なつて。

\* 2 平衡：釣り合いがとれて安定した状態にあること。

\* 3 撥水：水をはじくこと。

\* 4 なめし革：動物の皮から毛や脂肪を取り去つてやわらかにした革のこと。

問一 文中の **A** ～ **D** に入る言葉として最も適切なものをそれぞれ次のア～カの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア、だから イ、そのうえ ウ、だが エ、つまり オ、あるいは カ、ところで

問一 部①「正倉院御物として有名な一万数千点の宝物は、千二百年経つた今日まで、完全な形で残されている」とありますが、それはどうしてですか。次の説明文の **へ 1 へ 2** に当てはめるのに最もふさわしい語句をそれぞれ五字以内で抜き出して答えなさい。

・正倉院は **へ 1** という建築法を用いており、その内部を **へ 2** ことが可能であったと推測されるから。

問三 部②「日本の家屋は生きている」とあります。筆者はその理由をどのように考えていましたか。次の空欄に当てはまるように、本文中から十字で抜き出して答えなさい。

から十字で抜き出して答えなさい。

四十四  
一 部③「水田の中を歩く田下駄が、湿気の多い路面を歩く二本歯の下駄になり、山岳用や砂浜用の下駄を生んでいき、さらにさまざまなか形の下駄を生んで、その名称だけでも百数十種におよぶ」とあります。この一文で筆者が伝えたいことはどのようなことですか。本文中の言葉を用いて、四十字以上五十字以内で説明しなさい。ただし、文章の中に「日本人」という語句を必ず用いて解答しなさい。

問五 一 部④「なあさらで」とあります、これはどのようなことを言おうとしたものですか。次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

20

ア、なおさら洋靴の必要性が高まり

なおさらてたゞめな作り話であり

なれど、靴を脱ぐ必要かな?

なれど足の汗が乾燥して

本  
なおのひ足が蒸れてしまい

問六  
部⑤「“ツナヌキ”という立派な靴があった」とあります  
が、どんな点が立派だといえるのですか。次の空欄に当てはまる  
ように、本題から十五字で抜き出して答えなさい。

問七 文中の□に入れるのにふさわしい語句を次のの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア、象徴性  
イ、人間性  
ウ、藝術性  
エ、科学性  
オ、安全性

間八 一 部⑥「日本では、（）というエピソードがある」とあります、筆者はこのエピソードをどのような例として用いたと考えられます

すか。次の空欄に当てはまるように、本文中から二十字で抜き出して答えなさい。

——部⑦「日本のような湿気の多い国のためにも、通気性という観点から一度、グラス（草の）レインコートを考え直してみる必要がある」と筆者は言っていますが、履物や蓑（レインコート）以外で、日本人が草を材料として作り出した「生活の知恵」の実例を一つ、自分で考えて答えなさい（ひらがなでもよい）。

問十 次のア～オの説明のうち、本文の内容と一致するものには○を、一致しないものには×をそれぞれつけて答えなさい。

ア、下駄に二本の歯がついているのは、どんな場所でも足の平衡を保てて歩きやすいからである。

ウ、現代の日本人は、伝統的な生活用品を外見の善し悪しだけで判断して馬鹿にすることがある。

エ、鼻緒つきシリツパは、日本人の生活スタイルの変化にともなつて生まれた、和洋折衷の履物である。

二 次の各問に答えなさい。

## A 漢字に関する問題

問一 次の①～⑤の漢字と同じような読み方（構造）になつているものを、あとの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。  
なお、同じ記号を複数回用いてもかまいません。

- ① 焼肉 ② 本末 ③ 無口 ④ 粉雪 ⑤ 味方

ア、円高（えんだか） イ、手相（てそう） ウ、駅弁（えきべん） エ、野原（のはら）

問二 次の――部について、カタカナは漢字に直し、漢字はその読み方をひらがなで答えなさい。

- ① カゼン敷で野球の大会が開かれる。  
② 子どもにゲネツ剤を飲ませる。  
③ 皆さんフルつてご参加下さい。  
④ 秋祭りは、神社の境内で行われる。  
⑤ 私の母は、小児科の医師をしている。

### B ことわざ・慣用句に関する問題

問三 次の慣用句の空欄部 [ ] に入れるのにふさわしい言葉をそれぞれひらがなで答えなさい。なお、解答にあたっては [ ] に指定された字数で答えて下さい。

- ① 「憎まれつ子世に [ ] 」 【四字】 : 〔意味〕憎まれるような者が世間で幅を利かせること。  
② 「高を [ ] 」 【三字】 : 〔意味〕たいしたことはないと見くびること。  
③ 「味を [ ] 」 【三字】 : 〔意味〕一度うまいことがあって、またそれを期待すること。  
④ 「水を [ ] 」 【二字】 : 〔意味〕仲のいい間柄の邪魔をすること。  
⑤ 「眼鏡に [ ] 」 【二字】 : 〔意味〕目上の人認められたり、気に入られたりすること。

C 文法・言葉づかいに関する問題

問四 次の①～⑤の文章の――部には、言葉の使い方に誤りがあります。それぞれ五字以内でもつともふさわしい言葉に直しなさい。

ただし、ひらがなで答えて下さい。

- ① 妹は私の話に相槌あいづちを入れながら聞いてくれた。
- ② あの人のは、いつも滅めつらず口ばかり言いつてている。
- ③ あなたの意見いんけんは、まったくまことに的てきを得といてていない。
- ④ 彼女 彼女は急に弱音おとこゑをもらし、泣なき出した。
- ⑤ 兄兄の人柄ひとがらについては、友達ともだちの誰だれもが太鼓判たいこばんを打たつた。







